

# らい 来ぶらり 35

## 書庫の散歩

—和書めぐり—

運用課長 境 経夫

今回は、入庫利用のできない学部生の諸君のために書庫内の和図書をおおまかに紹介してみる。6層にわたる書庫のうち、3・4層では全集・叢書類が目立つ。個人全集は各ジャンルにわたり量も多く、探せば思いがけない人のが見つかるだろう。

主題毎の叢書では『初期新聞全集』（安政～明治）『大日本史料』『日本庶民生活集成』など、文学では『世界戯曲全集』の他、SF、ミステリー、大衆小説まで多種多彩だ。個別の著作では伝記・研究書も多い。文化史、地方史、民俗などは資料も多く、読みでがある。

音楽・演劇・映画なども、最新のを徐々に増やしつつあるが、まだ量は少ない。自然科学関係は、学習にすぐ役立つような最新の入門書、

概論書を開架図書室に補充しているが、書庫には残念ながらこれと言うべきものに乏しい。

また、書庫の壁面書棚には『肉筆浮世絵』『水墨大系』『中国の博物館』など、美術を主とした大型本が別置されている。陶芸、建築等にも見るべきものがあり、戦前の測量地図などまとまっている。これこそじかに手にとって眺めるべき代物だが、現状では書庫に置くしかない。

5・6層には旧分類と呼ばれる旧制高校時代の蔵書がある。漢籍や和装本の他、明治から

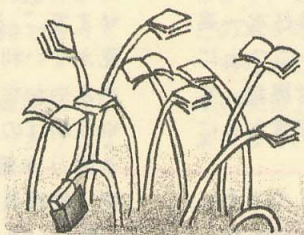
昭和(戦前)にかけての刊行図書で、黙阿彌、南北など全集が豊富。面白いのに巖谷小波の『大語園』がある。叢書では『万有科学大系』『世界地理風俗大系』など。個別の著作では全般に、日清・日露、大東亜戦争など、当時の風潮を如実に物語るものが多く『日露戦史』は大部である。世界史・革命史にも珍しいものが多々ある。文学作品にも、戦争の影が濃くにじみ出ている。古い雑誌では、『帝国文学』『太陽』なども保存されている。

また、2層には、毎年のお贈・交換による全国の大学の紀要類がずらりならんでおり、院生などの利用が多い。総合誌では、『改造』『中央公論』など割に古い。古いと言えば、明治22年から昭和13年までの新聞『東京日々』の原紙がある。往時の世相・風俗

の雰囲気を感じてみるものだ。

最後に、1層の〈学習院資料〉コーナーをみて見よう。本院で発行された図書、雑誌などはもちろん、クラブのPR誌、各種プログラムまで揃えてある。学習院の歴史をたどる貴重な資料である。

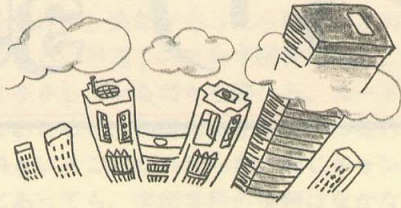
さて、今回は「散歩」というより、急ぎ足の「巡回」におわつたが、諸君の好読心に少しなりと訴える所あればと思う。今後、目録をじっくり検索し、書庫内の眠っている資料を活用されるよう希望する。





# 図書館の舞台裏から

## Part 2



### 雲の上のはなし

和書係とは？正式（かどうかは不明だが）には和漢書係という。和は「やまと」日本のことである。倭と同じで古く中国では日本のことを倭と呼んだ。漢は中国のこと。したがって和漢書とは日本と中国の書物ということになる。これを内容によって分類し、カタログ化し整理するのである。この作業はくる日もくる日も、雨の日も風の日も休むことなく半永久的に続けられている。

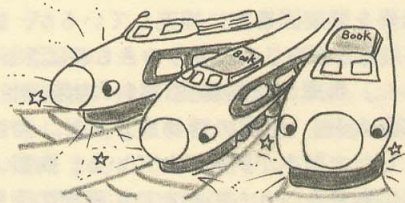
毎年2万数千冊の資料が購入され、ここに回って来る。それは物理的な量としても膨大である。仮に年平均約2万2千冊、背の厚さが2.5cmとして積み重ねていくと、なんとそれは550mの高さにもなる。これは日本一高いビルである新都庁舎（243m）を二つ上に重ねてもまだ余りある。雲の上の世界だ。すぐおーい!!これでは図書館も新都庁舎にみにもしないかぎり収まらない。!?

この膨大な量の資料をわずか数人のスタッフで整理している。優秀(?)なんだねきっと。しかし、洪水のように押し寄せてくる資料の波に、家内手工業的な整理方法では、もはや太刀打ちできない。そこで数年前から、現代文明の利器＝コンピューターを利用して日夜整理に励んでいる。今日もキーをたたく音と、悲鳴にも近いプリンターの音が鳴り響いている。  
(和書係 中村丈夫)

### 臨時増発・超特急

過密ダイヤは、何も鉄道だけの話ではない。年間2万冊近くの洋書が通過する整理課の洋書係でも目的地に急ぐ本たちが足踏みをしながら整然と並んでいる。洋書係にまわってきた時からすでに急行扱いの本。“〇〇先生借用希望”の短冊がはさまっている本。豪華本からたった1枚のパンフレットまで、整理待ちの資料の表情は、様々。形だって色々。カセット、ビデオ等のテープの類から、マイクロ資料、レーザーディスクまでである。

“至急利用したいそうです。”研究室から電話が入る。利用希望者は学生だろうか？それとも……？一刻も早い本の到着を誰かが待ち望んでいる！スタッフ6人、超特急の整理作業を開始。抱えている仕事を中断させ、コンピューターで情報を検索する事から始めて、何段階にも分かれた流れ作業が続く。それぞれの持場では、自分の所での停車時間を少しでも短縮しようと全力を尽くす。そのための残業も少なくない。“整理しました。引き渡せます。”という研究室への電話の向こうに見えない利用者とのきずなを見る。整理係のささやかな喜びの一瞬だ。一息つくまもなくやりかけの仕事にもどる。整理待ちの本がある限り洋書係のダイヤ編成は、いつも超過密、超満員で超特急。奮闘ぶりを一度ご覧にいたいものです。(洋書係 中村清子)



「Eine Nietzsche-Sammlung」—MünchenのAgathon書店が時間をかけてたった一つ作りあげたニーチェコレクション(449冊)を独文科が入手。多くの初版本を含むニーチェの作品や書簡、同時代の人によるニーチェ研究書などを雑誌論文まで巾広く集めてあり、総額751万円。



自力では探し当てるのが難しそうな本のなかから一冊紹介します。

ドイツのブロックハウス社1905年出版の「根付」についての本です。古いので一瞬手がためらうかも知れない外見ですが、中身は「ねえホラ見て」と近くの人をつつきたくなるような53枚のカラー図版入りです。

根付というのは印籠、巾着、煙草入れ等腰にさげるものの紐の先につけて帯にはさむために用いられた留め具のことですが、これが実に実に凝っています。見た人はきっと思わず手にとってみたいくなり、ひとつ見ると、もうひとつ見たくなる。そういうものだから当然コレクターがい

ます。ところがこの根付のコレクター、実は国内よりも外国に多いのだそうです。というのも、明治維新後、日本人の生活様式が変化すると前述のような“腰下げ物”の需要は激減し、根付も役目を失いました。そこへ西欧人がやって来て、その珍しさすばらしさに魅せられてせっせと持ち去って行ってしまったらしいのです。

根付は江戸時代後半が流行の最盛期でした。ではその起源はというとはっきりしな

いのですが、室町時代末期頃から武士の間で印籠、火打袋が常用されだしたのが一般化のはじまりとされます。当時の根付は実用本位の素朴なものであったようです。それが江戸時代に入り上流社会で印籠を儀礼的な装身具として用いるようになるにつれ次第に根付も装飾的な工芸品となり、江戸時代中期には庶民の間でもてはやされるようになりました。それからだんだん根付は意匠も広範囲に、種類も多様に技法も精細になっていきました。そしてその題材はいかにも庶民の間に流行したもので、一般的平俗的で、当時の好尚や世相をよく反映しています。

さて Netsuke という芸術品、異国の人の眼に

はどう映るのでしょうか。この本の根付及びその理解の為の諸々についての説明はやはり異国人独特のものがあります。自国ながら直接には知らない時代に関することを、異国の文字で読むのも何か不思議な感じがします。気が向いたら書庫に黄昏れているこの本を呼び出してみてください。

ちなみに、和書には『印籠と根付』（『日本の美術』第195号）があります。これもよろしく。  
(洋書係 篠原三佳)

### 「Netsuke」 Albert Brockhaus 著



## 購入希望を出そう

書店で見かけたり、参考文献リストや目録で見つけた本などが図書館にない、ということが続いたとき、2冊ぐらいまでならあきらめて自分で買えますが、4・5冊ともなると、「ちょっと読んでみる」ためにはとても買ってはられません。

そうやって10数冊の本を見送っていたとき、購入希望の制度に気がきました。初めは色々面倒な手続きを伴ったり、また、利用したい本はすでに審査された末購入しないことになっているのかも、と思っていたのです

が、希望はかなり容れてもらえることがわかりました。

以後、時折出してみる購入希望が何度か通り、自分の希望で買った本が書架に並んでいるのを目にしてささやかな幸福を覚えたものです。しかし、あまりに高い本にはさすがに手がでないらしく、否。また、購、となっても1カ月ぐらいはじらしてくれるので、その本に対する熱がうすれてしまうことも。

それでもとてもありがたい制度なのです。  
(史学科3年 樋口 裕之)



## 参考室あれこれ

学習院大学社会学研究室で出している「社会学研究年報」についての問い合わせを受けた。余部があったらほしいとの希望である。早速この社会学研究室がどこのことをさしているのかを調べる。カード目録にあたると、加藤秀俊ゼミナール発行の資料ということがわかった。同じキャンパスにあっても、学部学科の情報はなかなか入りにくい。時間が過ぎてい場合はなおさらである。また学会などで、事務局が各大学持ち回りしてくる変わる変わってたり、先生が個人で主宰している会などの資料の請求もある。同じようなゼミ資料でも、「靖

政ゼミ年報」のようなネーミングである、こちらは大変助かるといえる。

図書館では、学内の刊行資料や個人著書を寄贈して下さるようお願いしているが、全てを集めることは難しい。サークル・同好会の資料はなおさらである。辻邦生先生のように原稿を史料館に寄託されている例もある。先日も、大野晋先生の「人間の作る言葉・言葉を作る人間」という著作があるかという問い合わせ。これは、「日本語の年輪」（新潮文庫）に収録されていた。「ありません」「しりません」では通用しないことである。

（参考係 甲斐 静子）

## 太いパイプで 目白＝戸山



“インドの民話集「パンチャタントラ」を探しています。そちらで所蔵している叢書『アジアの民話』に掲載されていないか調べて下さい”、“砂糖の消費量を知りたいのですが、最新の『食料需給表』の該当箇所をFAXで至急送って下さい。”といった面倒な、また図々しいお願いを、大学図書館や法経図書室にしています。何せ当短大は“学習院”の一員ですから、電話一本・FAX一枚でいろいろ無理も聞いてもらえようというわけです。10万冊の蔵書の短大図書館にとって、88万冊を有する大学の蔵書と図書館機能はとて頼りになる存在なのです。情報化が進み、文献目録・記事索引が充実し、利用したい資料が増えてきているのです。

というわけで、大学構内や図書館で勝手がわからずマゴマゴしている短大生を見掛けたら、どうぞ親切にしてください。

（短大図書館 野村 恵子）

## お知らせ

- 大学祭の期間中は図書館を閉館します。

10月31日（木）から11月5日（火）の大学祭期間中は、展示会場となりますので図書館は閉館します。

利用できませんのでご了承ください。

- 図書館の空調機器が変わりました。

図書館に、ガス使用の冷暖房機器が取り付けられました。

これまでより快適に過ごすことができますでしょう。

- 指定図書コーナーをご存じですか？

一般教育の授業を担当していらっしゃる先生がたに指定していただいた、講義と関係の深い本をまとめてあります。

1階開架図書室の新書コーナーの隣にあります。ご利用ください。

来ぶらり No.35 1991年10月1日発行

発行責任者：高本 進 編集委員：広瀬淳子 石田京子

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎03(3986)0221